

キリスト教と太陽信仰の接点

—サークル型聖堂と古代ローマの戦車競技場—

山 田 順

目 次

1. 問題提起
2. サークル型聖堂
 - 2.1. 近年の発掘と研究成果
 - 2.2. 建築学的特徴と機能
 - 2.3. 建築プランの類型学的起源
3. 古代ローマの戦車競技
 - 3.1. 戦車競技と競技場
 - 3.2. 戦車競技と太陽信仰
 - 3.3. 皇帝の支配イデオロギー
4. 図像学的考察
5. ま と め

1. 問題提起

古代地中海世界において、キリスト教が、ヘレニズム・ローマ社会に深く浸透しながら拡大していくプロセスは、ひとつには、キリスト教と国家権力との関係の変化の諸相であり、また同時にそれは、キリスト教と古代ローマ社会に存在した異教との対立や習合の諸相でもある。

このような、古代末期のキリスト教を取り巻く多様な関係の変化を、より多面的に明らかにするためには、単に文献学的資料のみに依拠するのではなく、発掘作業によって出土した多くの考古学的資料を丁寧に拾い上げながら活用す

ることが肝要である。

今回、筆者は、キリスト教考古学の最新の発掘成果のなかから、4世紀のローマに特徴的なサークル型聖堂 (*basilica circiforme*)²⁾に注目し、その建築プランの類型学的起源について考察する。そのなかで、特に、このサークル型聖堂と帝室との関係、および、このサークル型聖堂の建築プランと当時の太陽信仰のシンボリズムとの密接な関係を指摘したい。これらの手続きを踏まえて、4世紀前半のローマにおいて、キリスト教と国家権力、そして太陽信仰の三者の関係の一端を明らかにすること、それが本稿の目的である。

2. サークル型聖堂

サークル型聖堂とは、コンスタンティヌス帝によるミラノ勅令(313年)直後から建設が開始された、第一世代のキリスト教教会建築のひとつで、現在まで、都市ローマに限定的にその存在が確認されている³⁾。

サークル型聖堂の建築平面プランは、今日知られるラテン十字型やギリシア十字型とは大きく異なり、翼廊構造をもたず、側廊がそのまま後陣と一体化して通常の聖堂の祭壇位置を回廊のように回り込むシンプルなものである(図1)。

また、奇妙なことに、聖堂のファサード面が、身廊の軸線と直行せず斜めに傾斜しているものが多い。現在のところ、近年発掘されたアルデアティーナ街道のサークル型聖堂をはじめ6例の同類型の聖堂の存在が確認されている。それらは、そのどれもが、埋葬との密接な関係をもつ葬礼型聖堂の特徴を示しており、4例までが地下共同墓地(カタコンベ)の真上の地上に、もしくはそれに極めて近接して建てられている。最後に年代史的には、全てがコンスタンティヌス帝治世から4世紀中頃までに建設されたものと推測されている。

2.1. 近年の発掘と研究成果

ヴァチカン・キリスト教考古学研究所大学院教授 V. フィオッキ・ニコライは、1991年9月、サン・カリストのカタコンベの西側、アルデアティーナ街道

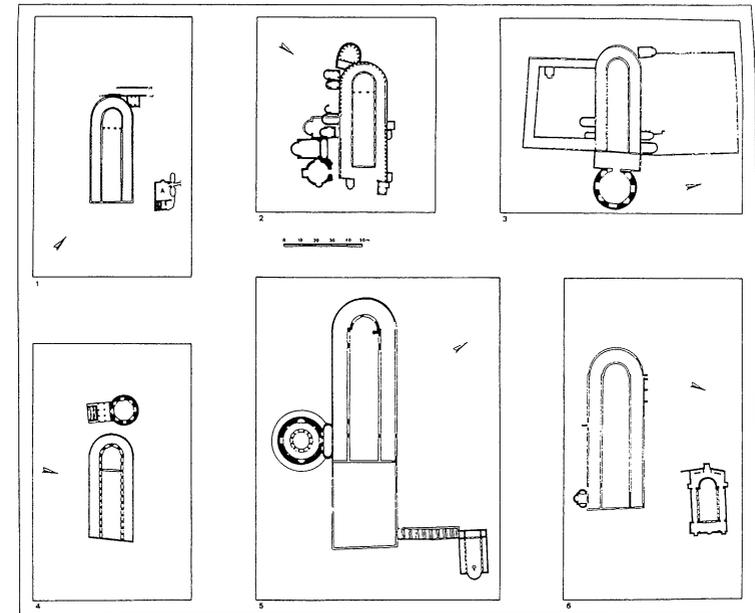


図1 ローマで確認されたサークル型聖堂の平面図
上段左から右へ：1. アルデアティーナ街道の聖堂(1993-96年発掘) 2. 聖使徒聖堂(サン・セバスティアーノのカタコンベ、アッピア街道) 3. サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノのカタコンベの聖堂(ラビカーナ街道) 下段左から右へ：4. プレネスティーナ街道の聖堂(素性不明) 5. サンタニューゼのカタコンベの聖堂(ノメンターナ街道) 6. チリアカのカタコンベの聖堂(ティブルティーナ街道)

寄りの牧草地での調査中に、半円形状の僅かな幅に牧草が育っていない部分を発見した。直ちに航空写真の撮影を行ったところ、明らかにサークル型聖堂の特徴を示す構造体の外壁ラインが確認されたため、1993年から96年にかけて、特に重要な半円形の中心部を含んだ構造体の一部(20m×20m)に限定して考古学的発掘を行った(図2 a/b)⁴⁾。

[主な発掘データ]

部分的ではあったがこの発掘の結果、次のことが明らかとなった。残念ながらこのバシリカは、床下から基礎レベルを留めるのみで、側壁以上の上部構

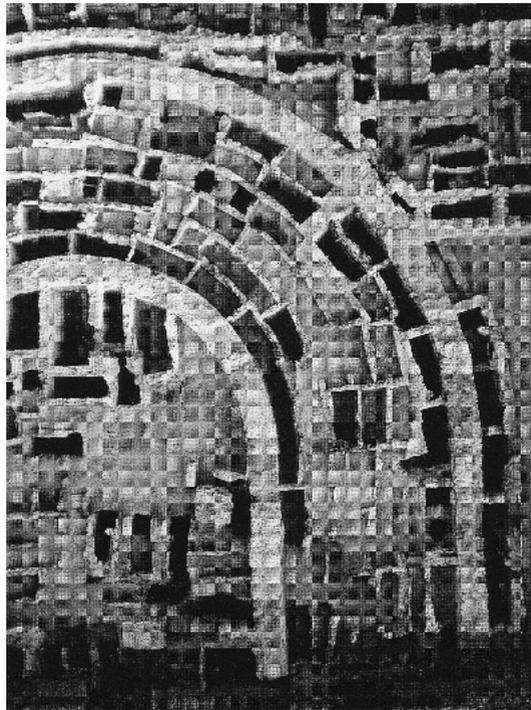


図2a サークル型聖堂（ローマ、アルデアティーナ街道沿い）1993-96年の発掘全体写真

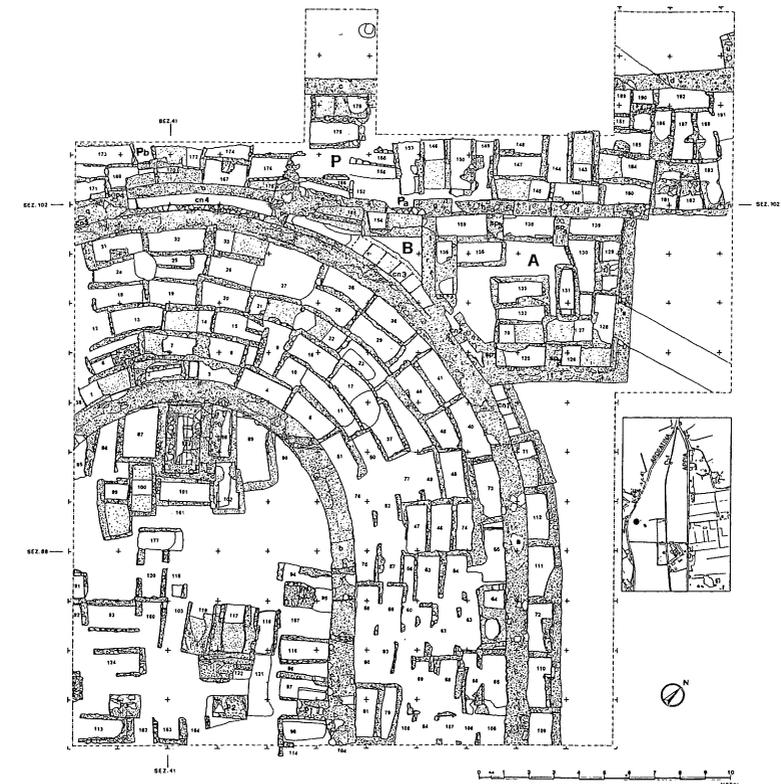


図2b サークル型聖堂（ローマ、アルデアティーナ街道沿い）1993-96年の発掘平面図

造体や装飾等は一切発見できなかったものの、内環の半円頂点部から、明らかにこのバシリカの中心に据えられたと思われる一基の墓、およびそれを取り囲むように配置された無数の墓群が出土した（図2a）⁵⁾。また、これらの墓からは、指輪、腕輪などの装身具、留め金、陶器ランプ、ガラスや陶器類、象牙製品や大理石製小箱などの副葬品が数多く出土した⁶⁾。特筆すべきは、多くの墓の内部から出土した硬貨の存在であった。これは、それまで、キリスト教徒は行うことはなかったと考えられていた、異教的な死者への硬貨奉獻の習慣を、彼らもまた確実に継承していたことを証言する貴重な証拠となった。その他、368年から445年の間で年代決定可能な墓碑銘が多数出土したことから、少なく

ともこの時代に、すでにこの聖堂が使用されていたことが明らかとなった。さらに、これらの墓碑銘や副葬品からの推測年代、および位層学的年代と壁面構造の類型学的年代などから、このサークル型聖堂の創建は、4世紀前半、ほぼ30年から40年頃と推測された⁷⁾。

【文献学的証言と考察】

『教皇の年代記』（*Liber Pontificalis*）をはじめとする文献学的証言によれば、この発掘現場付近には、問題のサークル型聖堂発見までに、未だ確定されてい

ない教皇ダマズス（366-384）によるもの、および教皇マルクス（336）による二つのバシリカが存在していたことが伝えられている⁸⁾。今回の発掘による考古学的データによれば、このサークル型聖堂は、少なくとも368年には使用されていたことが明らかにされており、また、少なくとも6世紀にまで遡るローマの巡礼案内に基づく地誌学的分析によれば、ダマズスのバシリカは、問題のサークル型聖堂よりもさらに南に存在すると考えるのが妥当であると判断されることから、フィオッキ・ニコライは、このサークル型聖堂が教皇マルクスによって336年に創建されたものである可能性が高いと考えた。

さらに、先の『教皇の年代記』の教皇マルクスの記事では、このバシリカが、コンスタンティヌス帝の財政的援助をもとに、同教皇によって建てられたこと、また、その聖堂内部は、特に埋葬空間として占有的に使用されていたことが証言されている⁹⁾。この後者に関する証言は、今回の発掘で明らかになったように、サークル型聖堂が、市壁内部の多くの礼拝施設専用のバシリカと異なり、明らかに葬礼型バシリカ (*basilica funeraria*) としての性格を示していることに一致する。さらに、教皇マルクスが埋葬されたバシリカについて言及された、8世紀初めの碑文が発見されたことにより、このサークル型聖堂の素性に関する仮説はほぼ確証される形となった¹⁰⁾。すなわち、教皇マルクスは、ローマのキリスト教共同体に新たな埋葬用スペースを整備するために聖堂を創建したが、自らもそのバシリカ内に埋葬されたと考えられる。

サークル型聖堂の同類型の聖堂は、その殆どがそうであるように、地下共同墓地に近接して建てられている。事実、フィオッキ・ニコライによって発掘されたサークル型聖堂もまた、未だ素性が明らかでない無名の地下共同墓地 (*anonima della via Ardeatina*) に近接している¹¹⁾。この地下共同墓地には、複数の殉教者が埋葬されていたことが推測されることから、Ch. ピエトリは、教皇マルクスが、自分と信徒の埋葬施設としてこの聖堂を創建した際、当時のキリスト教徒の多くがそうであったように、殉教聖人の墓への近接埋葬 (*vicinato santo*) による聖人庇護を祈念していたに違いないと指摘している¹²⁾。

2.2. 建築学的特徴と機能

フィオッキ・ニコライによれば、これらのサークル型聖堂の主たる機能は、第一に、特定の殉教者もしくは重要な聖職者の遺骸を安置することにあった。また、同時に、少しでも聖人の近くに埋葬されること (*vicinato santo*) を望む当時の多くの一般信徒に、聖堂の内部空間（主に側壁や床下）を、埋葬空間として提供すること、これらが、このタイプの聖堂建築の主要機能であった¹³⁾。第二に、聖堂内部は、日常的には一般信徒の葬儀や記念の祭儀のために使用され、また、特定の殉教者の記念日には、多くの巡礼者や参列者を収容しながら、記念の祭儀や典礼が盛大に執り行われたと考えられる。事実、6例のサークル型聖堂のうち4例に関しては、ローマで人気のあった個別の殉教聖人に奉獻する形で、その殉教者の墓、もしくは殉教者にまつわる記念の場所に、これらサークル型聖堂が建設されていることが分かる¹⁴⁾。

また、サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノのカタコンベの聖堂、および、サンタニエーゼのカタコンベの聖堂の場合、その本体に、それぞれ、皇帝親族のための巨大な集中プランの霊廟が付帯している。前者はコンスタンティヌス帝の母ヘレナの霊廟、後者はコスタンツァの霊廟と考えられているものである。なお、サン・セバスティアーノのサークル型聖堂には、その側壁に裕福な貴族階級のものと思われる霊廟が複数付帯しているが、特に左側廊中央部に見られるとりわけ大きなアプシスをもつ霊廟については、コンスタンティヌス帝の妻ファウスタの霊廟とする説、あるいは、同皇帝の母ヘレナの霊廟（但し、ラビカーナ街道沿いにその遺骸が移されるまで）とする説が存在する¹⁵⁾。このような状況から、サークル型聖堂の機能には、その聖堂建設の財政的支援を行った、パトロンとしての皇帝やその親族の遺骸を埋葬する働きも有していたと言えよう。皇帝とそのファミリーにとってもまた、殉教聖人の庇護の保証のもとに埋葬されることは、大きな魅力であったに違いない。また、同時に、このような最初期のキリスト教聖堂に付帯した皇族用霊廟の存在感は、コンスタンティヌス帝とその後継者達の、「新たな宗教」に対する深い寄与の明確な宣言でもあったとも言えるだろう。

2.3. 建築プランの類型学的起源

このサークル型聖堂の建築プランとその類型学的起源について、とりわけ、そのサークル型という平面プランと回廊型の側廊構造について、これまでに複数の説が提出されているが、それらの内で有効なものは以下の三つに集約される。

第一には、当時、聖堂内で実際に行われていたと推測される、今では知られていない、何らかの具体的な典礼に起因すると考えるもので、サークル型聖堂の特徴的な回廊構造は、たとえば行進のような特殊な祭式と関係していたとする¹⁶⁾。

第二には、サークル型聖堂の機能的側面に起因すると考えるもので、この説によれば、回廊構造の採用は、聖堂内部に、より多くの埋葬空間（特に中央の聖人の墓により近接した空間）を創出するためのものであるとする。また同時に、聖堂中央部で行われる典礼が、多くの参列者や巡礼者から見やすいように配慮されたものとして説明される¹⁷⁾。

第三には、既存の公共建築物からの転用説である。M.トレッリによって提出されたこの考え方によれば、特に、古代ローマの主要都市に必ず存在していた戦車の競技場が、その建築形態の起源になっているという。また、戦車競技そのものが本来有していた葬礼的シンボリズムと深く関係しており、同時代の聖堂の十字プランや洗礼堂の集中プランが、死に対する勝利、復活の暗示的意味を示しているように、サークル型というプランもまた、強い象徴的価値をもっていたのではないかと推測する¹⁸⁾。

上述の第一、第二の考えは、このサークル型聖堂の建築プランの特殊な形態の起源について、機能的理由以上のものを一切見ようとはしていない。一方、トレッリの考えは、未だキリスト教特有の聖堂建築が確立していない4世紀前半の時代状況と、このサークル型聖堂の多くが皇帝の財政援助をもって建てられ、従って、実際の聖堂建設が、当然、戦車競技場も含めた帝国の公共施設の建設に熟知した職人集団の手によって行われた可能性が高いことを考え合わせれば、極めて高い蓋然性を備えているように思われる。そこで、このトレッリ

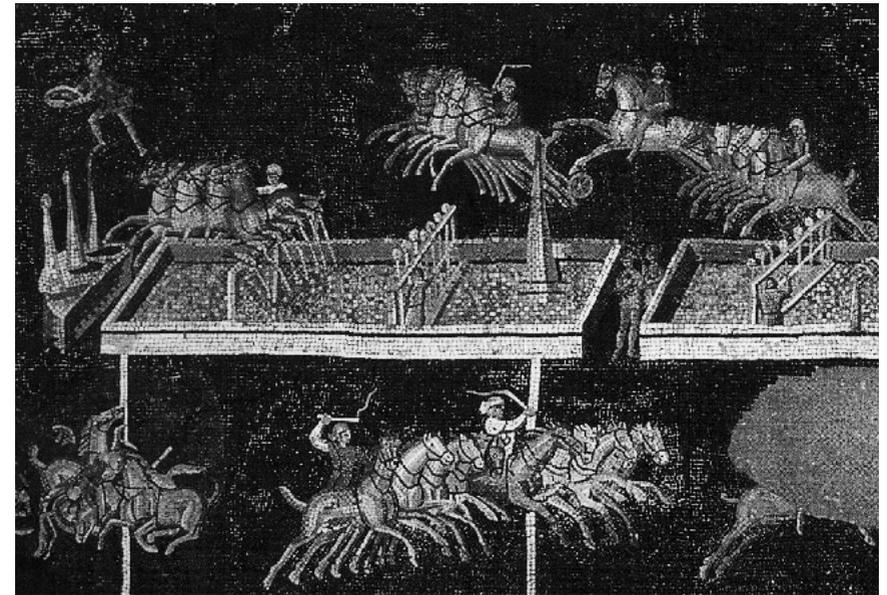


図3 ローマ時代の戦車競技，モザイク，リヨン博物館蔵

の説を再検討するために、近年、ローマのマクセンティウスの戦車競技場に関する体系的調査を行ったG.イオッポロによる最新の研究成果をもとに、古代ローマの戦車競技場とそのシンボリズムについて以下に見ていこう¹⁹⁾。

3. 古代ローマの戦車競技

古代ローマにおける戦車競技は、コロッセオに代表される円形闘技場で行われていた格闘技とともに、盛大な娯楽競技のひとつとして市民を熱狂させた（図3）。古代都市ローマでは、すでに前4世紀に、最も古い戦車競技場（hippodromus）が街のほぼ中心部に建設された。後に「チルクス・マクシムス」（最大の戦車競技場）と呼ばれるようになるこの施設は、カエサル の治世には、全長621m、全幅118mにもおよぶ巨大公共建造物として整備され、一度に約15万

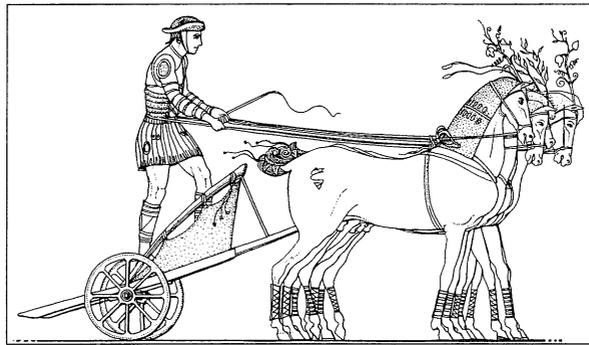


図 4 a 戦車競技用四頭立馬車 (quadriga) と競技者

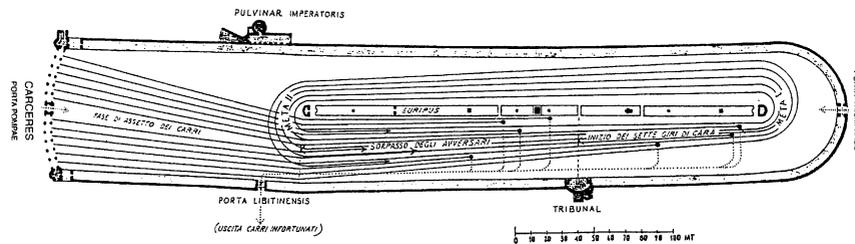


図 4 b マクセンティウスの戦車競技場 (ローマ, アッピア街道沿い), 平面図と競技周回軌跡

人の観衆を収容することが出来たという。

3.1. 戦車競技と競技場

この種の競技場の構造は、大きさの相違はあるものの、どれもほぼ同じ形態的特長を示していた (図 4 b)²⁰⁾。戦車競技は楕円周回によって競われるもので、競技場の主要構造は、長い直線をなす疾走コース (arena) と半円形にカーブする転回点 (meta), 12台の戦車が一行に整列して入場するための中央ゲート (carceres), そして、疾走コースを中央で二分する分離帯 (spina) を備えていた。このほか、疾走コースの一方の観客席前列には、競技の判定を下す審判

席 (tribunal) が、また、それとは反対側の観客席のやや中央ゲートよりには、場内全域を見渡せるように考えられた特別の場所に、皇帝ファミリーのための貴賓席 (pulvinar imperatoris) が設けられた。競技場中央の分離帯上には、楕円周回を中心点を示す石柱オベリスクが基壇上に聳え、その前後には、戦車の周回数をカウントするための装置 (通常はイルカと卵の形状) が、また、その周囲には、必要に応じて水を補給するための水槽 (euripus) が配置されていた。

競技は、通常、赤、白、青、緑の4つに色分けされた12台の戦車 (図 4 a) によって、分離帯の周囲を反時計回りに7周回することで競われるのが常であったが (図 3)、転回点の構造は、疾走する12台の4頭立て戦車が一度に回るにはカーブが急で、戦車同士の接触事故や壁面への激突事故により、頻繁に死傷者がでるほど激しいものであったと推測される。出走不能になった戦車や馬、騎手は、コースの途中に設けられた緊急脱出ゲート (porta libitinensis) から、場外に速やかに排除された。競技が終了すると、勝利した戦車は、技場奥のカーブ中央に設けられた勝利門 (porta triumphalis) から場内に凱旋入場し、皇族用貴賓席前に進み出て、皇帝もしくはその代行者から勝利の月桂冠を授かるという荣誉に服した。

古代ローマ社会において、市民に提供される大きな娯楽のひとつであった戦車競技であるが、そこには、単なる娯楽競技としての側面に加えて、元来、太陽神に捧げられた石柱オベリスクを中心に行われるこの周回競技の、ある種の宗教的・象徴的意味を重ね見る可能性が古くから指摘されている²¹⁾。

3.2. 戦車競技と太陽信仰

後6世紀、ローマの政治家で著述家でもあったカッシオドルス (490-583) は、『雑録』 (Variae) の中で、戦車競技と競技場が内包する宇宙論的シンボリズムについて記している²²⁾。それによれば、競技場全体は、それだけでひとつの天界を形成する。競技場中央に聳える石柱オベリスクは天の頂にある太陽を示し、分離帯に設けられた水槽 (euripus) は大海を、疾走コース (arena) は大地を象徴する。また、中央門にある12のゲートは1年を構成する12の月を、

1回のレースの7周という周回数は7つの惑星を示しており、緑・赤・青・白の4色によるチーム分けは、それぞれ、春・夏・秋・冬の四季を象徴している。すなわち、オベリスクを中心に行われる戦車の周回競技は、太陽を中心に回り続ける天界の表象であるという。

P. ヴイルロイマーによれば、このような宇宙論的シンボリズムは、太陽信仰と深く結びついており、そこには「死者の再生」への願いが込められているという²³⁾。同様に、A. フレイザーも、戦車の周回競技の中に、このような太陽信仰に基づく再生、不死、永遠への祈願を見ている²⁴⁾。フレイザーは、この見地から、ローマ郊外のアッピア街道沿いに建設されたマクセンティウス帝の戦車競技場が、隣接して存在する早世した同帝の息子ロムルス²⁵⁾の霊廟と深く関わっていることを指摘する(図5)。すなわち、この競技場は、マクセンティウスによって、息子ロムルスの「魂の再生」を祈願して建設された。

近年、このマクセンティウスの競技場に関する体系的調査研究書をまとめた、イオッポロも、この競技場と死者の魂の再生祈願を結びつけている²⁵⁾。特に、ロムルスの霊廟を取り囲むように造られたポルティコ(列柱回廊)が、出走す

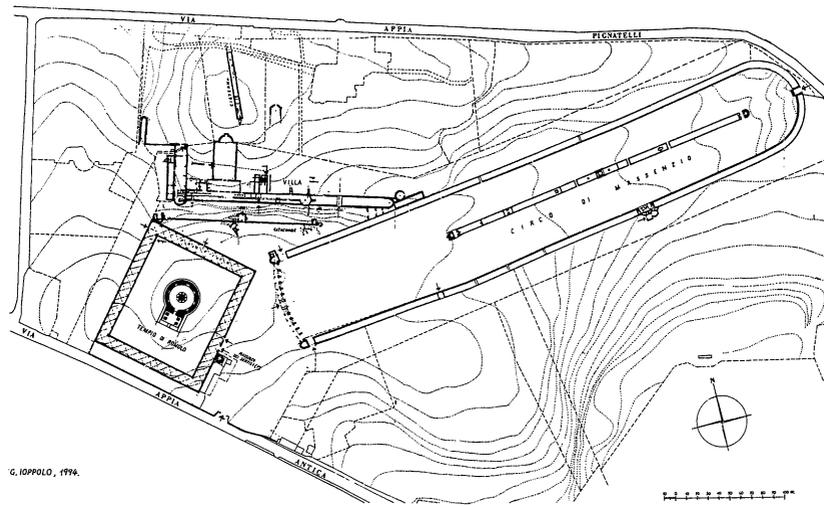


図5 マクセンティウスの戦車競技場(右)と息子ロムルスの霊廟(左下)

る12台の4頭立て戦車の厩舎として機能したとする新説は、十分に検証される必要があるものの、競技場と霊廟という一見全く異なった建築ジャンルに属する二つの建造物の相互関係を、より簡潔に説明するものとして興味深い。すなわち、死者ロムルスが埋葬された霊廟の厩舎から発した12台の戦車は、競技場という天界のシンボリズムの中で、オベリスクが象徴する太陽を中心に楕円周回を繰り返すことで、再生や不死、永遠の力を獲得し、再びロムルスの遺体が安置された霊廟へと帰還する²⁶⁾。

3.3. 皇帝の支配イデオロギー

ところで、古代ローマ社会では、特にアウグストゥス帝以降、このような太陽信仰に基づく「永遠」(*aeternitas*)の概念は、皇帝の神格化と結びつけられた。トレッリによれば、両者の結合は、まず古代ローマの貨幣や碑文上で行われたという²⁷⁾。たとえば、多く貨幣上で太陽神の姿で描かれた皇帝が十二の星座の円環に囲まれて登場する。また、皇帝の神格化(*apotheosis*)が、太陽神の馬車に乗る皇帝の姿を通して描かれる²⁸⁾。すなわち、戦車競技が内包する *aeternitas* の祈願は、皇帝の永遠性、不死、神格化と深く結びついており、その意味において、古代ローマにおける戦車競技は、このような皇帝神学とその支配イデオロギーを広く一般に伝えるプロパガンダの場でもあったという²⁹⁾。事実、戦車競技場の分離帯(*meta*)中央に太陽神のシンボルとして聳え立つオベリスク基壇レリーフには、ゲルマン民族をはじめとする他民族に対する皇帝の「勝利」(*victoria*)、および敗者に対する皇帝の「慈悲」(*clementia*)の主題が刻まれるのが常であった。残念ながら、戦車競技場を飾っていた図像資料のうち、このようなオベリスク基壇レリーフの完全な作例はローマには現存しないが、コンスタンティノープルの戦車競技場に存在した、ほぼ同類のオベリスクとその基壇レリーフが、イスタンブールのアギア・ソフィア大聖堂近くの競技場跡地に保存されている³⁰⁾。以下、この基壇レリーフの図像について簡単に触れておこう。

【オベリスク基壇レリーフの図像】

この基壇は、390年頃、皇帝テオドシウス1世によって競技場にオベリスクが据えられる際に製作されたもので、その四面には、戦車競技の観客席に勢ぞろいした皇帝ファミリーやその側近たち、一般の観衆が、それぞれ異なった場面の中に刻まれている（図6a）。

基壇南西面には、大きく上下二段に分けられた画面上段中央に、天蓋によって囲まれた皇族用貴賓席に着座する皇帝とそのファミリーが、その左右両脇には皇帝の側近である貴族高官が、その背後には槍と盾をもつ帝室近衛兵と警備兵が描かれている³¹。下段には、一般の観衆が描かれているが、左端の二人が興奮している様子から、ここに刻まれた者たちが皆、戦車競技に熱中していることが理解できる。

基壇北西面（図6b）には、画面上段に南西面の場合と同じく皇帝と皇族ファミリーの特別貴賓席の様子が描かれ、画面下段には、腰を低く屈め片膝付いた10人の男性が、手に何かを携えて皇帝の前に歩み出ている³²。B.キールリッヒによれば、これらの男性の特徴的な毛皮の服装と帽子、尖った顎鬚、および彼らの仕草から、この場面が、テオドシウス帝が率いるローマ軍によって敗北したゲルマンの民による皇帝への貢物奉獻の場面であることは明白であるという。さらに、このような皇帝への奉獻の主題は、当時、他民族に対する皇帝の勝利（*victoria*）、および敗戦者に対する皇帝の慈悲（*clementia*）を広く一般に顕示することを目的に描かれたが、同時に、他の基壇面の図像主題との関連から、この奉獻の儀が、当時、戦車競技場内で競技開始の前後に、数万人の観衆を前に実際に行われた可能性を否定できないという。円形闘技場や戦車競技場が、皇帝にとって、競技観戦に集まり競技に熱中する民衆への、格好の政治的プロパガンダのステージとしても機能したことは容易に想像できる。図像学的には、画面上段に揃った皇族と側近らの貴賓席下の狭いスペースに、腰を深く折り曲げ皇帝に敬意を表しながら、這うように進み出る戦いの敗者の姿によって、両者間の上下のヒエラルキーが明確化され、戦いに勝利した皇帝の偉大さと権威が、誰にでも理解されるように具体的にイメージ化されている。

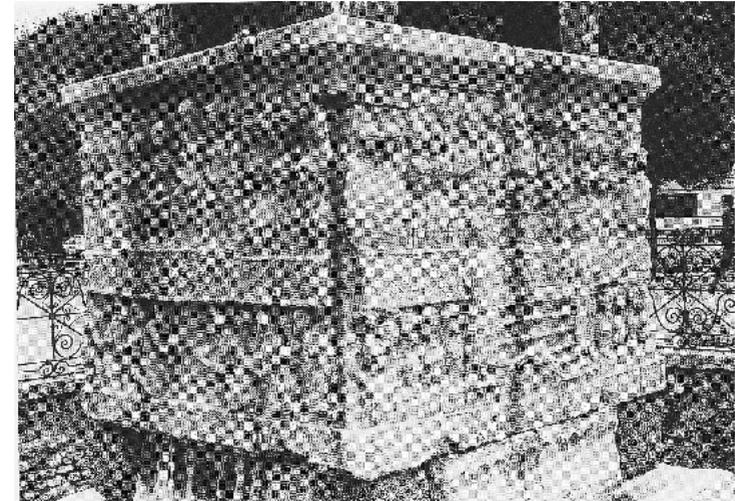


図6a コンスタンティノープルの戦車競技場オベリスク基壇（イスタンブール）

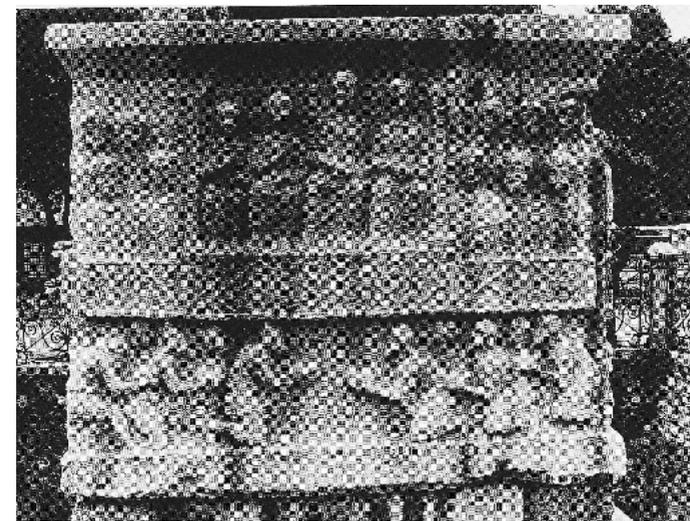


図6b オベリスク基壇レリーフ（北西面）

基壇南東面では、他の基壇面とは異なり全員が起立した状態で描かれ、皇帝が丸い輪を右手に持つことから、競技終了後に行われた、勝者への「勝利の冠」の授与式が描かれていることが容易に推測できる³³⁾。下段最前列には小さく描かれた楽団とダンサーたちが儀式を盛り上げている。人物の重要度に応じてその大きさを描き分けるという古代の図像学的セオリー通り、皇帝や勢揃いした側近たちの下段の従者たちに対する優位性が強調されている。

基壇北東面の図像（図6a, 画面右）は、上述の南西面とほぼ同様であるため、ここでの言及は省略するが、基壇の四つのどの面でも、貴賓席を中心とした上下二段の場面構成の中に、皇族から、貴族高官、近衛兵から一般観衆、そして戦いの敗者に至る、皇帝のヒエラルキーと、太陽神と同化された皇帝の支配イデオロギーが、戦車競技場のシンボリズムと重ねられながら効果的に視覚化されている³⁴⁾。

4. 図像学的考察

古代ローマの巨大公共施設であった戦車競技場と、第一世代のキリスト教サークル型聖堂との建築平面プランの相似性、および、古代世界において戦車競技が内包していた、太陽信仰に基づく祭儀としての宇宙論的再生のシンボリズムと、キリスト教がその信仰の核として主張する復活の概念との親和性を考え合わせると、トレッリが指摘したサークル型聖堂の戦車競技場起源説は、妥当性のあるもののように思われる。

加えて、サークル型聖堂に関する文献学的資料が証言するように、これらの聖堂が帝室の財政的援助によるものであるならば、実際の聖堂建設の具体的な建築設計・建設技術においても、既存の宮廷建築の影響を直接的に受容するものであった可能性が十分に推測される。なぜなら、313年まで、カタコンベの地下埋葬空間と、通常の住宅を僅かに改造した程の礼拝施設である「ドムス・エクレスシア」（私宅教会）以外、固有の建築物など一切持ち得なかったローマのキリスト教共同体が、一夜にして、巨大聖堂を実現するための独自の建築プ

ランや建築様式を手に入れたとは考え難いからである。むしろ、スポンサーとしての帝室が、お抱えの建築設計技師や職人といった熟練した宮廷技能集団を動員しながら、戦車競技場の建築平面プランと建設技術を、新たな公認宗教の祭儀空間建設のために応用したと考えるほうがより自然であろう。

ここで筆者は、このサークル型聖堂の建築平面プランを巡る問題について、これまで一切行われてこなかった図像学的側面からの新たな考察によって、このトレッリの戦車競技場起源説の蓋然性をさらに傍証したい。これまで、この問題に集中した図像学的考察が行われなかったのは、現存するサークル型聖堂の作例のほとんどにおいて、その内部空間を飾っていたと思われる装飾の図像資料が現存しないという決定的な事実起因するものであった³⁵⁾。

しかし、今回、筆者は、ローマの地下に残るカタコンベ（キリスト教地下共同墓地）に描かれた壁画のうち、4世紀後半の墓室内装飾の作例を通して、この限界を超えることが可能であると考えた。というのも、ごく近年のカタコンベ研究における地誌学的・図像学的研究成果によれば、4世紀後半のある特定の墓室群に見られる構造的・図像学的特徴には、地上の建築空間、すなわち、地上に出現して間もない巨大なキリスト教聖堂の内部空間を、地下の個人の墓室内に再現しようとする強い意志が存在する、と考えられているからである³⁶⁾。したがって、現存する地下の墓室の図像学的特徴のなかに、地上のサークル型聖堂内部を飾っていたであろう図像の痕跡をある程度類推することが可能となる。

そこで、以下、4世紀後半のものと考えられるローマのあるカタコンベの墓室の壁画と、先に見たコンスタンティノープルのオベリスク基壇レリーフの図像を考察し、両者の類似性を指摘したい。

【ドミティッラ・墓室39の壁画図像】³⁷⁾

ここで取り上げるのは、ローマはアッピア街道沿いの大規模地下共同墓地のひとつ、ドミティッラのカタコンベ墓室39（NR）の壁画である（図7a/b）³⁸⁾。この墓室は、六角形という特殊な墓室プランに三基のアルコソリウム（アーチ型壁龕墓）を備えており、さらにその上部には、明かり窓から傾斜した天井に

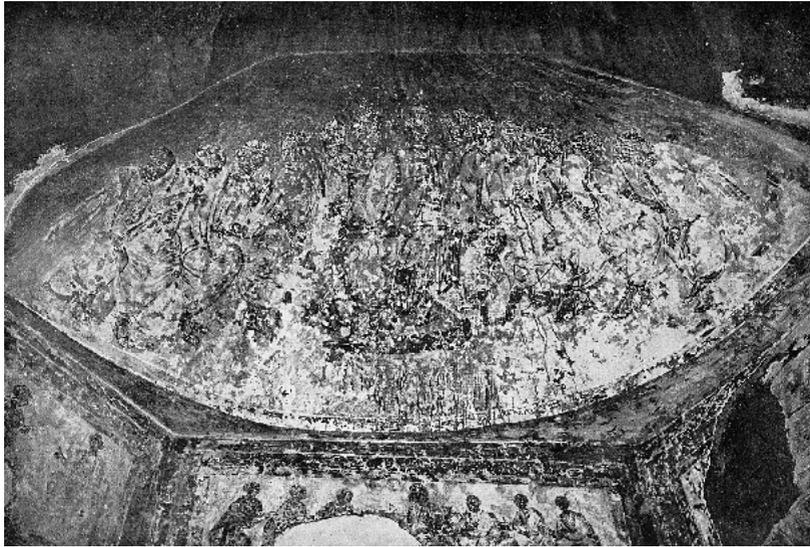


図7a 「キリストと十二使徒」ドミティッラのカタコンベ 墓室39(NR) 上部アプシス

続いて、まるで地上の聖堂の後陣のような四半球形のアプシス構造が存在する。墓室がコンスタンティヌス帝治世以降に発生した地区に存在していること、多角形プランという特殊な墓室の類型学的特徴、さらに壁画の主題および様式的特徴などから、この壁画は、4世紀後半に描かれたものであると考えられている。墓室上部構造に見られるアプシス状の湾曲した壁面には、トゥニカとパリオを身にまとった玉座に着いたキリストを中心に、左右両脇に使徒たちが6人ずつ椅子に座る「キリスト・マエスタス」(Cristo Maestas)あるいは「キリストと十二使徒」(Collegio Apostolico)の主題が描かれている(図7a)。この主題は、その名の通り12使徒に講話するキリストの姿を描いたものであり、主として4世紀中頃から、カタコンベ絵画や石棺レリーフの図像に登場するものである³⁹⁾。

このアプシスの壁画の下には、画面中央に長髪の巻き毛を湛え精悍な顔立ちのキリストが玉座に着席する(図7b)。この若者の左右両側には、向かって右側にトゥニカとパリオを身に纏いサンダルを履いた3人の男性像が、また左側

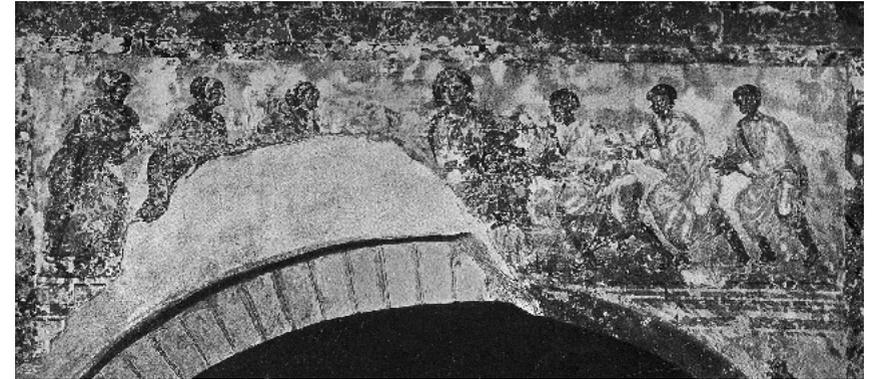


図7b 「殉教聖人の戴冠式」ドミティッラのカタコンベ 墓室39(NR) アプシス下壁

には、同じく長裾のトゥニカと頭から首筋にかけてショールを巻いた3人の女性像が、それぞれ中央に着席したキリストに向かって、同じようにやや腰を引き両手を前に差し出すという不可思議な姿勢で描かれている。特に最前部の男性に顕著な大きく踏み込んだ右脚と前傾姿勢、二人目の男性が示す親指を真上に立てるほど大きく開いた両掌の仕草、そして進行方向に向けられた三人の強い眼差しが、画面上に張り詰めた緊張感と動きを生み出している。O.マルッキによればこの墓室下部構造の壁画には、玉座のキリストから勝利の冠を受ける聖人たちの姿、いわゆる「聖人の戴冠式」(Coronatio Sanctorum)が描かれているという⁴⁰⁾。ここでいう聖人は迫害期の殉教者を示し、彼らは殉教によって地上の権力と死に打ち勝ったのであり、その証である「勝利の冠」を玉座のキリストから今まさに受け取ろうとしているという。

ここで特筆すべきは、墓室内に出現したアプシス構造の存在により、構造的にも、あるいは図像的にも明確な上位空間と下位空間という、いわゆる装飾空間のヒエラルキーとでも呼ぶべき空間の階層化が発生していることである。また、残念ながら今では採光用井戸が完全に塞がれているために、その光の効果を確認することは出来ないが、大きく傾斜する天井は、侵入する外光を墓室奥へ導き入れるためのものであり、特にアプシスに描かれた「キリストと十二使

徒」，およびその下位空間に描かれた「殉教聖人の戴冠式」，そして，さらにその下に現実に埋葬された故人の墓（アルコソリウム内部）の位置にまで，その光をまるでスポットライトのように集中させる働きを持っていたものと推測される。

このように，墓室39（NR）に見られる構造的・図像的要素は，全て，この垂直方向の空間の階層性を際立たせることに集中している。すなわち，この墓室39（NR）の製作者にとって最大の関心事は，天上界の階層構造の中に，彼らの肉親の魂が確実に組み込まれているという確証である。この唯一の目的のために，この墓室には，構造的・図像的空間のヒエラルキー（階層構造）が導入されているのである。

筆者はここで，この墓室39（NR）に見られる4世紀後半のカタコンベに出現した図像学的特長が，先に言及したコンスタンティノープルの戦車競技場に存在した，オベリスク基壇レリーフのそれと，極めて類似していることを指摘したい。

まず初めに，すでに見たオベリスク基壇の4面を飾るレリーフ上で，皇帝の権威を表象するために機能していた上下二分割された図像空間のヒエラルキーが，同様に，この墓室39（NR）の図像構成を最も特徴付けるものとなっている。また，墓室の上部構造であるアプシスを飾る「キリストと十二使徒」のなかで，左右を使徒たちに囲まれて玉座に座るキリストの権威ある姿は，あのオベリスク基壇の四面全てに見られた，左右を側近や近衛兵らによって守られながら玉座に座る皇帝の姿を彷彿とさせる。さらに，墓室の下部画面に描かれている，殉教者に対して行われる「戴冠式」の図像主題は，オベリスク基壇南東面において展開されていた，戦車競技の勝者に対して行われる「勝利の冠の授与式」の主題と，奇妙にも一致している。加えて，この「戴冠式」に臨む殉教者が，腰をかがめ両手を差し出しながら，左右から画面中央のキリストの前に静々と歩み出る姿は，オベリスク基壇北西面の下段に刻まれた，ゲルマン人の皇帝への貢物奉獻の姿とも単純に類似している。

すでに言及したように，墓室39（NR）に見られる4世紀後半のカタコンベ

絵画と墓室構造が，すでに地上にその威容を誇っていた第一世代のキリスト教会建築の地下への模倣によるものであるとするならば，当然ながら，これらの図像とその画面構成の起源を，サークル型聖堂の内部装飾に見ることが可能であろう。そして，上述のオベリスク基壇レリーフの図像との類似性は，さらに，これらのキリスト教権威図像の起源が，同時代の戦車競技場においても使用された宮廷図像にまで遡る可能性を示唆している。このことは，すなわち，サークル型聖堂と戦車競技場との親近性をさらに傍証しているように思われる。

5. まとめ

宇宙論的再生のシンボリズムや皇帝の支配イデオロギーのひとつの表象手段として機能した古代ローマの戦車競技とそのための競技場。一方，コンスタンティヌス帝による寛容令直後から約半世紀の間に，殉教聖人を記念して次々に建設され，ローマにおける重要なキリスト教巡礼モニュメントのひとつとして機能したサークル型聖堂。両者の間にどのような関係性が存在したのか。あるいは，両者の相似性は，単に建築プランの類型学的レヴェルに留まるものなのか。結論を急ぐことは出来ない。しかし，サークル型聖堂のほとんどが，皇帝の財政的援助のもとに建設され，それらのうちの幾つかは，明らかに，皇帝親族の霊廟を備えている。従って，このサークル型という特殊な建築プランを示す礼拝施設は，そこに付帯する霊廟に埋葬された皇族の魂の復活についてもまた，殉教聖人の庇護を求めつつ祈念するという重要な目的を備えていたと言える。さらに，そこから，キリスト教が公認宗教のひとつに加えられた後も帝室によって篤く信奉され続けていた太陽信仰が，その再生と復活のシンボリズムという共通イメージを媒体に，キリスト教復活信仰の表象形態である聖堂建築の発生プロセスに深くかかわっていたことが推測される。

このように，第一世代の教会建築のひとつとして出現したサークル型聖堂は，4世紀前半というキリスト教を取り巻く未だ混沌とした時代にあって，キリスト教と国家権力，そして太陽信仰の三者の出会いと接触を物語っているのだ

る。

註

- 1) サークル型聖堂 (*basilica circiforme*) の基本文献は以下の通り: Ch. PIETRI, *Roma christiana. Recherches sur l'Église de Rome, son organisation, sa politique, son idéologie de Miltiade à Sixte III (311-440)*, I-II, Rome 1976, pp.29-33, 37-51; H. BRANDENBURG, *Roms frühchristliche Basiliken des 4. Jahrhunderts*, München 1979, pp.61-120.; F. TOLOTTI, *Le basiliche cimiteriali con deambulatorio del suburbio romano: questione ancora aperta, Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts. Römische Abteilung*, 89, 1982, pp.153-211; J. GUYON, *Le cimetière aux deux lauriers. Recherches sur les catacombes romaines*. Città del Vaticano 1987, pp.207-263.; M. TORELLI, *Le Basiliche circiformi di Roma. Iconografia, funzione, simbolo, Felix Temporis Reparatio. Atti del Convegno Archeologico Internazionale "Milano capitale dell'Impero Romano"* (Milano, 8-11 marzo 1990), Milano 1993, pp.203-218; V. FIOCCHI NICOLAI, *La nuova Basilica Circiforme della via Ardeatina, Rendiconti della Pontificia Accademia Romana di Archeologia LXVIII*, 1995-1996, pp.69-233; *La nuova basilica paleocristiana "circiforme" della via Ardeatina, Via Appia sulle ruine della magnificenza antica*, Rome 1997, pp.78-83; *Strutture funerarie ed edifici di culto paleocristiani di Roma dal IV al VI secolo*, Città del Vaticano 2001, pp.55-58; E. LA ROCCA, *Le basiliche cristiane "a deambulatorio" e la sopravvivenza del culto eroico, Aurea Roma*, Roma 2000, pp.204-220; Th. LEHMANN, *Circus oder Basilica? Zu einem Grund(riss)problem in der Archäologie, Festschrift für Hans Wiegartz*, Münster 2000, pp.163-169.
- 2) サークル型聖堂の基本的特徴については、以下を参: FIOCCHI NICOLAI, *La nuova basilica paleocristiana "circiforme"...* *op.cit.* pp.55-58.
- 3) *ibid.* p.55.
- 4) 発掘に関しては、報告論文である以下が最も詳しい: FIOCCHI NICOLAI, *La nuova Basilica Circiforme della via Ardeatina, Rendiconti della Pontificia Accademia Romana di Archeologia LXVIII*, 1995-1996, pp.69-233
- 5) FIOCCHI NICOLAI, *La nuova basilica paleocristiana "circiforme"...* *op.cit.* pp.78-79.
- 6) FIOCCHI NICOLAI, *La nuova Basilica Circiforme...* *op.cit.* pp.145-171.
- 7) *ibid.* pp.171-175
- 8) FIOCCHI NICOLAI, *La nuova basilica paleocristiana "circiforme"...* *op.cit.* p.82.
- 9) DUCHESNE, *Liber Pontificalis*, I, Paris 1986, p.202.
- 10) ICVR, IV, 12458: *iuxta aediculam Domine Quo Vadis* (教皇マルクスのバシリカはドミニクオ・ヴァディスのエディコラの近くに存在する)
- 11) 「無名の地下共同墓地」に関しては以下に詳しい: A. NESTORI, *Pitture inedite di un*

- cimitero anonimo della Via Ardeatina, *Rendiconti della Pontificia accademia Romana di Archeologia* 45(1972-73), p.151.
- 12) なお、このサークル型聖堂の最終的な放棄は、11世紀の末、教皇マルクスの遺骸が、市壁内の現ヴェネチア広場にあるサン・マルコ教会に移されたことによると考えられている (*Acta Sanctorum*, Octobris).
- 13) FIOCCHI NICOLAI, *La nuova basilica paleocristiana "circiforme"...* *op.cit.* pp.83.
- 14) 聖ペテロと聖パオロ, 聖ペテロ・エ・マルチェリーヌス, 聖ロレンツォ, 聖アグネス。
- 15) この説によれば、コンスタンティヌス帝がコンスタンティノポリスに遷都したことから、元来、同帝のために建設されたラビカーナ街道沿いの聖堂 (サンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノのカタコンベの地上に建設) の霊廟が不要になり、母ヘレナの遺骸が、サン・セバスティアーノの聖堂に付帯する霊廟からそちらに移動されたとする。
- 16) FIOCCHI NICOLAI, *op.cit.* p.78.
- 17) *ibid.* pp.78-79.
- 18) TORELLI, *op.cit.* pp.207-208. トレリは、サークル型聖堂の類型学的特長と、戦車競技場との類似性について、さらに以下のように指摘しており興味深い。すなわち、側壁の長さが左右異なり、平面プランにおいてファサード面が左右の側壁に対して約5度前後の傾斜を示すという、サークル型聖堂特有の不可解な構造は、実際の戦車競技場のスタートゲート (*carceres*) を模している。また、競技場の *carceres* と同様、聖堂のファサードもその多くが構造体の西側に位置する。サンタニエーゼ、およびサン・セバスティアーノの聖堂については、付帯する皇族用霊廟と聖堂全体との位置関係が、競技場における皇族貴賓席全体を最も見渡せる場所— の位置関係に一致している。ラビカーナ街道の聖堂 (*ad duas laurus*) の場合は、皇族用霊廟が、聖堂の傾斜したファサード前面に存在するという特殊な構造を示しているが、これは、マクセンティウスの競技場と彼の息子ロムルスの霊廟の位置関係に類似している。
- 19) G. IOPPOLO, G. P. SARTORIA (ed), *La Villa di Massenzio sulla via Appia*, Roma 1999. その他、古代ローマの戦車競技とそのシンボリズムに関しては以下の文献を参照: G. VESPIGNANI, *Simbolismo, magia e sacralità dello spazio circo, Quaderni della Rivista di Bizantinistica*, 14, 1994; A. CARILE, *Il circo-ippodromo e la città, La città gioiosa*, Milano 1997, pp.109-138.
- 20) 競技場の構造的特徴に関しては以下を参照: G. IOPPOLO, *La Struttura Architettonica*, in G. IOPPOLO, G. P. SARTORIA (ed), *La Villa di Massenzio sulla via Appia*, Roma 1999, pp.103-196.
- 21) 古代世界における戦車競技とそのシンボリズムについては以下を参照: CARILE, *op.cit.* pp.111-132; TORELLI, *op.cit.* pp.208-217; *Lavinio e Roma*, Roma 1984, pp.199-

- 200.
- 22) CARILE, *op.cit.* pp.125-126 ; TORELLI, *op.cit.* pp. 209-210.
- 23) P. WUILLEUMIER, *Cirque et astrologie*, in «Mélanges de l'École Française de Rome» 51, 1927, p.194 ; CARILE, *op.cit.* p.131.
- 24) TORELLI, *op.cit.* p.210.
- 25) IOPPOLO, *op.cit.* pp.173-174.
- 26) *ibid.* p.174, fig. 72.
- 27) TORELLI, *op.cit.* pp.210-217.
- 28) ウイーン歴史博物館蔵のルキウス・ウェルス像など、数多くの作例が存在する。
- 29) G. P. SARTORIO, Inquadramento Storico, in G. P. SARTORIA (ed), *Il Circo di Massenzio sulla via Appia*, Roma 1999, pp.96-99.
- 30) コンスタンティノープルの戦車競技場オベリスキの基壇レリーフに関しては、以下の文献を参照, B. KIILERICH, The Obelisk Base in Constantinople : Court Art and Imperial Ideology, *Acta ad Archaeologiam et Artivm Historiam Pertinentia*, Series Altera in 8, vol. X, 1998.
- 31) *ibid.* pp.46-55.
- 32) *ibid.* pp.34-45.
- 33) *ibid.* pp.55-62.
- 34) *ibid.* pp.63-67.
- 35) 唯一, サンタニエーゼのサークル型聖堂に付帯していたコスタンツァの霊廟に、いわゆる「法の伝授」と「鍵の伝授」のモザイクが現存するのみである。
- 36) V. FIOCCHI NICOLAI, F.BISCONTI, D. MAZZOLENI, *Le Catacombe di Roma*, Regensburg 1998, pp.36-57.
- 37) A. NESTORI, *Repertorio topografico delle pitture delle catacombe romane*, Città del Vaticano, 1993, p.126.
- 38) この図像に集中した唯一の研究としては、拙稿「キリスト権威図像の出現—ドミティッラのカタコンベ・墓室39 (NR) の図像プログラムを中心に—」(『西南学院大学 国際文化論集』第17号 第2号 2003年) 105-154項を参照されたい。
- 39) F. BISCONTI, *Temi di Iconografia Paleocristiana*, Città del Vaticano, 2000, pp.125-126.
- 40) O. MARUCCHI, *Le Catacombe Romane*. Opera postuma, Roma 1933, pp.173-176.

図版クレジット

- 図 1 V. FIOCCHI NICOLAI, *La nuova Basilica Circiforme della via Ardeatina, Rendiconti della Pontificia Accademia Romana di Archeologia LXVIII*, 1995-1996, p.71, fig. 2.
- 図 2 a V. FIOCCHI NICOLAI, *La nuova basilica paleocristiana "circiforme" della via*

Ardeatina, Via Appia sulle ruine della magnificenza antica, Rome 1997, p.80.

- 図 2 b *ibid.* p.79.
- 図 3 G. P. SARTORIA (ed), *La Villa di Massenzio sulla via Appia*, Roma 1999, p.196.
- 図 4 a C. CAMARDO, *La Villa di Massenzio nel parco dell'Appia Antica*, Roma 1999, p.25
- 図 4 b *ibid.* p.115, fig. 6.
- 図 5 SARTORIA (ed), *op. cit.*, p.105, fig. 1.
- 図 6 a B. KIILERICH, The Obelisk Base in Constantinople : Court Art and Imperial Ideology, *Acta ad Archaeologiam et Artivm Historiam Pertinentia*, Series Altera in 8, vol. X, 1998, p.34, fig. 5.
- 図 6 b *ibid.* p.36, fig. 8.
- 図 7 a - b 筆者による撮影